

平成 26 年度第 24 回「中村元東方学術賞」「特別顕彰」授賞式

平成 26 年 10 月 10 日インド大使館

## 第 24 回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員会における選考経過をご報告し、併せて受賞理由を申し述べさせて頂きたいと思っております。

さてこの度の選考に際しましては、(「中村元東方学術賞」審査委員会委員)の先生方の他に、過去 23 回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願いし、それらのご意見が出た結果を基にして、郵便による投票の結果、皆様にご案内状でご報告申し上げましたように、第 24 回東方学術特別顕彰を

ユベール・デュルト(Hubert Durt)国際仏教学大学院大学名誉教授、フランス国立極東学院「法宝義林」前編集長

に差し上げることに決定致しました。

### ユベール・デュルト名誉教授授賞理由

ユベール・デュルト名誉教授は、1936 年(昭和 11 年)、ヨーロッパのベルギー王国の首都ブルユッセルでお生まれになり、1957 年(昭和 32 年)同国のルーヴァン・カトリック大学東洋学研究所(Institut Orientaliste)を碩学エチエンヌ・ラモット(Etienne Lamotte)教授の指導のもとにご卒業、さらに翌年 1958 年(昭和 33 年)には同大学文学部古典文献学の学士号も取得されました。その後 1960 年(昭和 35 年)から 3 年間、我が国の東京大学・京都大学に留学され、この時はじめて中村元先生に教えを受け、以来先生と親しい学問的・人間的関係をもたれるに至りました。そして 1970 年(昭和 45 年)6 月、ルーヴァン・カトリック大学より Ph.D. の学位を取得されました。

デュルト博士の学位論文は、パーリ文 Samantapāsādikā とその漢訳『善見律毘婆沙』及びパーリ歴史書 Dipavamsa 等を比較検討して、古代インド・セイロンの仏教史を明らかにされたものであり、師ラモット教授畢生の大作『インド仏教史』(Histoire du Bouddhisme Indien)の方法論を用いながら、さらにより新しい方向を探求せんとしておられます。

1965 年(昭和 40 年)再び日本に帰られて以来、今年でちょうど 50 年の間、デュルト博士はフランス国立極東学院(Ecole Francaise d' Extreme-Orient)京都支部法宝義林研究所の研究員、研究主任として、昭和 56 年以後は『法宝義林』編集長として、広く世界を巡って活躍されました。

『法宝義林』は、周知のように、中国・日本の資料に基づくフランス語の仏教百科事典であり、今日も京都に本部を置くフランス政府の文化活動ですが、そのはじめは 1926

年、初代日仏会館館長のシルヴァン・レヴィ教授と日本の高楠順次郎博士の間で決められたフランス極東学院(すなわちフランス政府)と日本学士院(すなわち日本政府)の共同事業でありました。

デュルト博士は、ご自身でも多くの項目を執筆され、同時に国内外の一流の専門学者を適切に選んで、活動を続けられました。またしばしば『法宝義林』の歴史と編集活動ならびに現代日本仏教の動向や、注目される研究書の出版などを西洋社会にむけて報告されております。この『法宝義林』の功績に対してはフランス政府から教育功労賞の「パルム・アカデミック賞」、同じく功労賞「メリート賞」が、また日本からは「新村出賞」が授与されました。

1996年(平成8年)よりは、招かれて国際仏教学大学院大学教授に就任、仏教学の教育にも従事され、2011年3月同大学を定年退職されて、ただちに同大学の名誉教授になられ、現在に至っております。

我が国のインド学・仏教学が本格的に欧米学界と広く深く交流するようになって、半世紀が過ぎました。この間多くの学者が個々の研究をもってこの絆をより強固にしてきたことは、いうまでもありません。しかしユベール・デュルト名誉教授以外に、この長い年月、休むことなく、その優れた学的資質と誠実にして魅力ある人間性によって、日本と他国の研究者たちが信頼しあう大きな世界を構築することに貢献した研究者を見ることはできないように思われます。

中村元先生は常に国際学術文化交流の必要性を語り、それをみずから実践された方であり、デュルト博士もまたその理想の実現に努力された方でありますので、東方学術特別顕彰にまことに相応しいものと判断し、今回の授賞となった次第であります。